

二〇二六年度 適性検査

「現代の国語、言語文化（古文・漢文を除く）」

解答番号

1

5

28

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお設問の都合で本文の段落に a s の記号を付してある。

以下は小川洋子⁽¹⁾『犬のしっぽを撫でながら』の中の一節である。

日常、何げなく目にした電信柱の番地や、

豚こま百グラム入りパックの値札が、

31番地や97円だったとする。

それらが素数だと気づいたトタン、^(a)

31番地は気高い印を電信柱に刻み、

97円は孤高の味わいを豚こまに与える。

分解されることを拒み、

常に自分自身であり続け、

美しさと引き換えに孤独を背負った者。

それが素数だ。

a 奇数と偶数が、(ちょうど季節と同じように) いかにか豊かな連想空間を形成し、擬人的な想像力を働きかけているのか、もうこ

れ以上の説明は不要だろう。要するに「奇数が好きですか、偶数が好きですか」という質問には、あなたが「調和よりも特異性を重んじる人間」なのか、「特異性よりも調和を重んじる人間」かの二者択一の問いが暗黙に含まれていることになる。

b 「あまのじゃく」を自認する人間がどちらを解答するかは明白であろう。そう僕は、少なくとも（この質問を発案した）10年前の時点では、生粋の奇数好きであった。無論、以上の論に **A** がなかったとして、僕が奇数好きであることは僕自身が「あまのじゃく気質」であることによる結果であると考えるのが自然であり、その限りにおいて、当初の問いである何が小鷹をあまのじゃくたらしめたのかに対して、何ら有効な材料を提供するものではない。

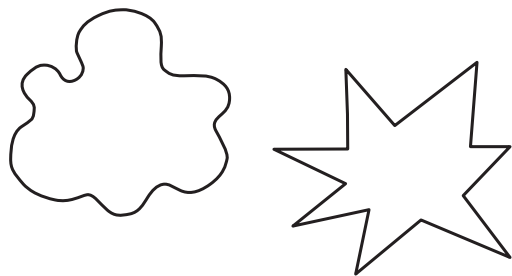
c それでも、ここでは一旦、普通に考えることをやめて、あまのじゃく思考に徹してみよう。そう、「奇数好き」であることが「あまのじゃく気質」の結果ではなく、原因であったとしたならば？

d 奇数なり偶数なりの属性は、いかにして好き嫌いの対象となり得るのか。この問題に対してこれまで繰り返してきた議論は、いささか印象論に走り過ぎていたかもしれない。以下では、奇数と偶数が、確かにそれぞれに異なる抽象的な概念と結びついていることを、心理学的な手続きを通して確認していこうと思う。

e 図1の二つの図形を見て、次の質問に答えてほしい。これらの形は、ある遠く離れた知的生命体の住む星の中で使われている数学記号で、一方が奇数でもう一方が偶数を表す。どちらが奇数でどちらが偶数だろうか。僕は自分が受け持っている授業で、毎年この質問を学生に投げかけると、すると、70から90パーセントの学生が、角ばった図形を奇数、なめらかな図形を偶数と答える。

f この質問は僕自身の着想によるものだが、言語学の世界では非常に有名な元ネタがある。オリジナルの質問は「一方がブーバ、もう一方がキキと発音する。どちらがブーバで、どちらがキ

図1 どちらが奇数でどちらが偶数？



キ？」というものだ。この実験についてはさまざまな報告があるが、それらに共通する傾向として、文化や性別によらず、丸い図形をブーバ、角ばった図形をキキと答える割合が圧倒的に高くなる。これをブーバキキ効果⁽³⁾という。

g なぜ丸い図形がブーバ (Bouta) で、角ばった図形がキキ (Kiki) であり、その逆ではあり得ないのか。この問題を理解してもらうには、ブーバやキキを、普通の意味での単語とは思わずに、擬音語⁽⁴⁾とか擬態語の類だと捉えてみればよい。

h 丸みを帯びた形状を擬似的に音声化するならば、(例えば)まさにその丸の形状を描いている手の運動が生き生きと連想されるような音声が付さわしいだろう。試しに、鉛筆と紙の擦れる音をアンプリファイ^(注)してみよう。それらをあえて文字に起こすと、丸であれば「す———さつ」、カクカクであれば「すつ、さつ、すつ、さつ」というような表現が適当だ。前者は「ブーバ」という音の響きに、後者は「キキ」というリズムによく馴染む^(注)。

i 無論、質問に答える人のほとんどは、このような意識的に説明できるようなプロセスを踏んでいるわけではない。それでも、僕たちはこうした感覚間の関連性の **B** をどこかで了解している。その種のリアリティーは、僕たちの中にいて、僕たちの手の届かないところで冷徹に作動しているパターン認識によつて、自動的に形作られているからだ。

j ブーバキキ効果に類する実験で使われる言葉には、(ブーバ／キキ以外にも)いくつかのバリエーションがある。代表的なものとして、「モマ／キピ」や「マルマ／タケテ」が挙げられる。(おそらくあなたの印象の通り) ほぼ全ての人は「モマ・マルマ」が丸い図形、「キピ・タケテ」は角ばった図形を指示する言葉であると感ぜられる。

k 「モマ」や「マルマ」には伸ばし棒(長音)が入らないので先程の解釈がピタリと当てはまるわけではない。それでも「キピ・タケテ」のような音と比べると、どこか柔らかくてふわふわした印象を覚えるのではないだろうか。「n」や「m」は共鳴音と呼ばれ、音波の時系列グラフを見るとわかるように、空気の振動が滑らかに連続的に変化する。逆に「k」や「p」はソガイ音^(b)と呼ばれ、それまでの流れから、突発的に新たな振動が始まる。

l こうした特徴は、ただ単に音声を音波として聴取しているだけでも伝わるが、実際に口を動かして発音する場面では、唇や舌

の運動の感覚や気流の触感からより一層に強く感じ取ることができるだろう。そして、これらの運動の感覚は、円や角ばった図形から受ける視覚的な印象と確かによく合致する。

m 発話に伴う運動感覚が、実際にブーバキキ効果の役に立っていることを示唆する実験がある。スプーンを舌に押し付けて口を閉ざした状態では一部のブーバキキ効果が減退する、というものだ。この減退の程度が特に（聴者よりも）難聴者において顕著だった、という知見はとりわけ重要だ。

n 要するに、ブーバキキ効果は、純粹に音声を聞き取ることによって駆動されるものと、発話によって駆動されるものと、少なくとも二つの経路から賦活され得るものであり、前者のチャンネルが閉ざされている難聴者にとっては、運動イメージを遮断されることの影響がよりジンダイになる、というわけだ。

o こうした感覚間の **C** の話を聞いて、一部の者が有しているといわれる「**共感覚**」⁽⁵⁾の現象を想起した読者もいるだろう。例えば、あるタイプの共感覚者は、楽器が鳴らされるたびに、——まるでバーチャル・リアリティー（VR）の中の出来事のように——周波数や音色に準ずる特定の色を感知する。そう、こうした視覚効果は、昨今であればVR技術を用いることで比較的容易に実装することができる。VRであれば、HMD（VRゴーグル）を着脱することで、日常と非日常世界を自由に往復することが可能だろう。ところが共感覚者の場合は、そうした選択権はない。望むと望まざるにかかわらず、色は音に対して選択の余地なく強制的に当人の意識の中にマギレ^d込んでくるのだ。

p 無論、ブーバキキ的な連想は、共感覚と異なり、その多くが無意識の水準で作動している。実際、自分がそんな連想を働かせていることを指摘されて驚く人も多いだろう。それでも、強制性という観点では、共感覚とそう大きくは変わらない。事実、「モマ／キピ」に対して、「○／▽」よりも「▽／○」の方がより、自然であると感受しようとしても、なかなかうまくいきそうになる。 「モマ」という発音の音声学的特徴が、「キピ」のそれよりも丸みを帯びているという、パターン、認識による、事実性は変えようがないのだから。

q このような半ば強制的に作用する感覚間 **C** は、幼児が言語を習得していくうえで、重要な役割を果たしている。もはや想像することすら難しいのだが、生まれたばかりの幼児にとって、事物や現象に対して「名前がある」という前提そのものが、そもそも自明なことではない。目の前で母親が音声を発して、それが何かを名指していることを受け入れるにはそれ相応の心的過程が要求されるのだ。ここで鍵となるのが **D** だ。

r **D** は、この種の前提が整備されていない状態でも、まさにブーバキ的な連想を介在させることで、語と対象とのつながりを無条件に直感させることができる——絵本の中で **D** 的な表現がいかに頻出するかを思い出してほしい——。ここで得られた「名」に対する気づきこそが、その後の発達過程における大量の言語学習のための強固な土台となるのだ。

s そう、——誰であれ——生後間もない時期の言葉は、いわば語から対象が滲み出してくるようなあり方で、ブーバキ的な回路を通じて感受されていたのだ。無論、この時期に培われた（主に）語の響きに対する感受性は、その後の発達過程で失われるわけではなく、さまざまな局面で活躍する。奇数と偶数に関する豊かな連想世界もまた、この原初的な感受性を抜きにして語ることはできない。

（小鷹研理『からだ身体がますますわからなくなる』より。出題の都合上、一部中略・変更した箇所がある）

（注）アンプリファイ——ここでは「音声を増幅して強調する」といった意味。

問1

傍線部(a)～(d)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、(a) 1、(b) 2、(c) 3、(d) 4。

(配点8点)

(a) トタン

1

- ① タンリョな行動をつつしむ。
- ② タンネンに絵画を仕上げる。
- ③ 相手のコンタンを見抜く。
- ④ タンテキに要点をまとめる。
- ⑤ 人間関係がハタンしてしまう。

(b) ソガイ

2

- ① 製品の化学ソセイを分析する。
- ② 開発による自然破壊をソシする。
- ③ 店頭からソアクな商品を排除する。
- ④ 産卵でサケが川をソジョウする。
- ⑤ 規定違反者のソチを検討する。

(c) ジンダイ

3

- ① ジントウで指揮をとる。
- ② ゲキジン災害に指定する。
- ③ ジンイ的なミスを防止する。
- ④ 資源がムジンゾウに存在する。
- ⑤ あの人の才能はジンジョウではない。

(d) マギレ

4

- ① 高熱で意識がコンダクする。
- ② 話に前後のミヤクラがない。
- ③ 隣国でナイフンが勃発する。
- ④ ハンザツな事務処理を終える。
- ⑤ 夢と現実とがコウサクする。

問2 傍線部(1)「小川洋子」の作品として適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、5。

- ① 『発微算法』
- ② 『和算の侍』
- ③ 『青の数学』
- ④ 『プリンキピア』
- ⑤ 『博士の愛した数式』

(配点3点)

問3

空欄 A) C に入る最も適当な語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、A 6、B 7、C 8。

(配点12点)

- A 6 ① 瑕疵かし ② 破損 ③ 贅言ぜいげん ④ 過失 ⑤ 欠落

- B 7 ① 要不要 ② 濃淡 ③ 明暗 ④ 優劣 ⑤ 快不快

- C 8 ① 協助 ② 連絡 ③ 共有 ④ 連合 ⑤ 共用

問4

傍線部 X 「賦活」の本文中における意味として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、9。

(配点3点)

X 賦活 9

- ① はたらきを促進させること。
- ② 個別にはたらきかけること。
- ③ 効果を増幅させること。
- ④ よい結果を生み出すこと。
- ⑤ じっくりと成果を出すこと。

問5

傍線部(2)『奇数好き』であることが『あまのじゃく気質』の結果ではなく、原因であったとしたならば？」とあるが、「奇数好き」であることが「原因」であるとはどういうことか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、10。

(配点4点)

- ① そもそも奇数が好きであること自体が、あまのじゃくな気質に起因しているということ。
- ② 奇数好きの多くがあまのじゃく気質であることが、両者の因果関係を裏付けるということ。
- ③ 偶数より奇数が好きだから、あまのじゃくで特異性を重んじる気質の人間であるということ。
- ④ 印象としては常識に反していても、数の好き嫌いとは人の気質には相関性があるということ。
- ⑤ 奇数の方を好むという自らの志向は、あまのじゃくな気質の発露であるということ。

問6

傍線部(3)「ブーバキキ効果」とあるが、本文ではこの効果を大きく分けて二つの感覚から説明している。二つ目の感覚の説明が始まる段落として最も適当な段落を、次の中から選びなさい。

解答番号は、11。

(配点5点)

- ① i 段落
- ② j 段落
- ③ l 段落
- ④ o 段落
- ⑤ q 段落

問7

傍線部(4)「擬音語とか擬態語」とあるが、空欄 **D** にはこれと同義の語が入る。その語として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、**12**。

(配点4点)

- ① アレゴリー
- ② レトリック
- ③ オノマトペ
- ④ ナラティブ
- ⑤ メタファー

問8

傍線部(5)「共感覚」、傍線部(6)「原初的な感受性」とあるが、筆者は両者をどのように捉えているか。その説明として最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、**13**。

(配点6点)

- ① 言語習得の基盤である点で、原初的な感受性の方がブーバキキ効果との関連性がより強固であると認識している。
- ② どちらも強制性をその特徴と認めつつ、原初的な感受性には無条件な直感でもあるという固有の特性を見ている。
- ③ 共感覚者にはその認識があるが、原初的な感受性は多くの人が忘却してしまっている、と異なる解釈をしている。
- ④ 原初的な感受性はブーバキキ的感覚の前提で、共感覚はブーバキキ的連想の帰結として生まれるものと見ている。
- ⑤ どちらも、本人の意志や意識がどうであつても否応なく感得いやおうされてしまう感覚である点に共通点を見出みいだしている。

問9

本文を読み終えた高校生が、本文の展開や内容について話し合っている。本文に即した説明として適当でないものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、14。

(配点7点)

- ① Aさん この文章、最初は数学の話かなと思ったけど、途中から言語の話に展開していくのが面白かったな。特に「ブーバキキ効果」っていうの、初めて知ったよ。形と音にそんな関連があるなんて驚きだ。
- ② Bさん この効果が幼児の言語習得にも関係してるっていうのが興味深いよね。言葉を覚えるとき、音の響きと意味が結びつく仕組みがあるなんて考えたこともなかったな。
- ③ Cさん 奇数と偶数にまで「好き嫌い」があるっていうのは確かにそうかも。形や音と結びついてるっていうのも納得だけど、それが心理的な好みや性格の話につながるのには新鮮だった。
- ④ Dさん 見た目のイメージだけじゃなくて、奇数と偶数がもともと持っている性質の違いも関係してるんだよね。数字の持つ特徴がこういう感覚につながるのになって思った。
- ⑤ Eさん 感覚的な要素と論理的な要素が入り混じっているのが特徴的だね。数学的な視点からも、心理学的な視点からも解釈ができて、読み方によって異なる印象を与える文章だね。

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「遺伝か、環境か」という問いは「生まれつきか、努力か」という問いと同じく、不可変か可変か、変えられないか変えられるかという問いとして表れると思われる。そして遺伝が変えられない要因、環境が変えられる要因と、一般に考えられるのだろう。

だからこの「遺伝か、環境か」という問いの構造は、「内在か、外在か」という次元と、「不可変か、可変か」という次元をあわせもっていると考えられる。とすると、外在だが不可変、つまり **A** も考えられることになる。社会学ではこちらのほうを「生まれ」とよぶことが多い。「遺伝」という意味での「生まれつき」とまぎらわしいが、これは区別しなければならない。自分を産み育てた親、生まれ落ちた地域社会、のつびきならない時代背景など、そこから逃れることが不可能、またはきわめて困難な、ひたすら受動的に受けとめざるを得ない環境要因である。「親ガチャ」という言葉が一時、はやっていたが、これはまさに自分の意志ではどうすることもできない家庭環境への嘆き、あるいはあきらめだろう。そしてそれをいうなら、親だけではなく、自分が生まれ育った土地の風土や人がつくりだす **B** など、とくに子どもころの環境はすべて、本人にとっては「ガチャ」である。

そして「自由意志でコントロールできるかできないか」という問いは、実は「内在か、外在か」という次元と「可変か、不可変か」という次元が直交する二次元空間をナナめに貫いた問いであることがわかる。「内在する可変なもの」が自由意志でコントロール可能、「外在する不可変なもの」が自由意志の及ばないものということである。そしてその枠組みを使うと、俗に言うところの「遺伝」とは「内在する不可変なもの」、環境とは「外在する可変なもの」というイメージに相当する(図1)。

(1) しかし本書の枠組みは、そうした **C** イメージとは異なる。すでに示したように、「環境」もまた遺伝の影響をうける。能力の中でも、ここでとりわけ重要なのは、社会的に適切に機能している集団の成員が、「価値がある」と評価した能力であ

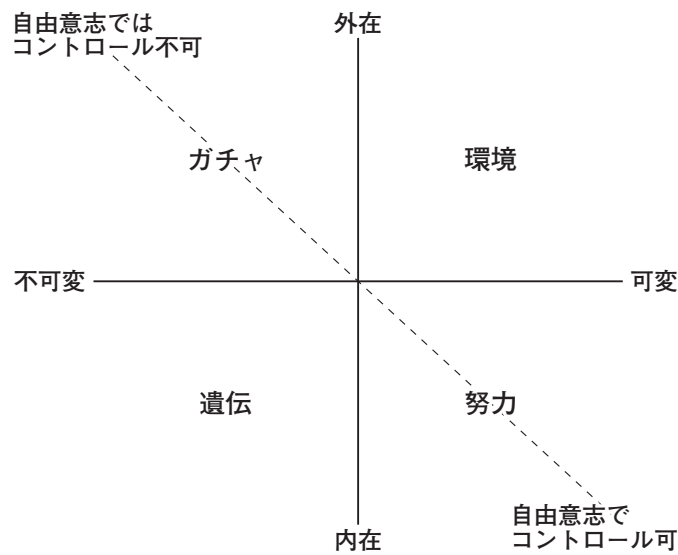


図1 一般的に考えられている「遺伝」「環境」「努力」「ガチャ」のイメージ

る。「社会的に適切に機能している集団」などとあいまいな概念を持ち出してしまったが、ここではそのあいまいさを残したまま、厳密には定義しないことにしよう。

「フィギュアスケートの才能」は、その社会にフィギュアスケートというスポーツ競技があり、それにプレーヤーや評価者（観衆や審判や評論家）などとして関わる人たちがいるから成り立つ能力概念である。将棋の才能、ピアノの才能、受験の才能……などもたいていは同じように、その能力を披露する場が社会的につくられ、その能力を発揮しているパフォーマンスが他者によって評価される。ギネス世界記録には「24時間連続で何回縄跳びをとべるか（2021年の時点では15万1409回が最高記録らしい）」とか「口の中に何本のストローを入れられるか（400本が最高記録らしい）」とか、どうでもいいような（失礼）、しかしおもしろい「能力」のリストが並んでいる。これらが「社会的に適切に機能している集団によって価値があると認められた能力」なのかどうかは **I** 疑問だが、少なくとも「ギネスワールドレコーズ」という組織が認定しているという意味で、社会的である。もつともそれをいうならば、一流大学入試に合格する才能は、本人以外の誰にとつて価値があると評価される才能なのかも問われなければならないが、一般には「学歴」として社会に根深く通用する通行手形になっている。

いずれにせよ才能は、「能力」の中でも社会的に突出した価値を持つと評価されるものことである。「能力」とは、すでに述べたように「知識」や「記憶」と同義・同次元の、学習性の心的機能であると考える。ただしこれ自体は構成概念にすぎず、具体

的な実体があるとはかぎらない。実際にあるのは、一つの数学の方程式を正しく解く、4回転半のジャンプを成功させる、リスト作曲の超絶技巧を要する「ラ・カンパネラ」を芸術性豊かに演奏する、あるいは居間をきちんと掃除する、テギワ(b)よくカルボナーラ・スパゲッティをつくる、初めて会った人と気の利いた会話をかわす、といった具体的な行動である。

しかし、ある人がたった一つの方程式を解けるだけではなく、ほかの方程式も正答できる、方程式以外の数学の問題も解ける、といった一連の関連行動を観察できたとき、**D**。同じことは、フィギュアスケート能力、ピアノ演奏能力、室内掃除能力、パスタ調理能力でも、さらには運動能力や音楽能力、調理能力などのより一般的なものも想定することができる。ただし、ある行動がたまたま一回、偶然できたが、その後は何度やってもできなかったとしたら、それは「まぐれ」であって、その能力があるとはいえない。だから「能力」は、「ある特定の状況や課題において、個人に同じ機能をもった行動を反復して起こさせる神経的・身体的ネットワークの活動」と定義できるだろう。

数学やフィギュアスケートやピアノがその社会になければそれらの能力はないという意味では、あらゆる「能力」は生物学的実態ではなく社会的構成概念である。そして極言すれば、生物学的実態と思われるいかなる物質や現象（たとえばDNAや光合成）も、それを抽出して人間が考察の対象としている時点で、すべて社会的構成概念である。身長などは疑いもなく生物学的であると思われるかもしれないが、チンパンジーや赤ん坊の身長をどう定義するかは、それに関心を持つ人からどのように社会的コンセンサスを得られるかによる。

だが、身長に関わる諸条件は生物学的であることも疑いない。同じように、どんなに社会的に構成された「なんちゃら力」（知的能力、掃除力など）という概念が指し示そうとする能力もまた、生物学的であるといえる。生物学的実態と社会的構成概念を別物とみなすこと自体がナンセンスなのである。

いま「能力」を、社会的に認知されたものとして定義した。しかしそのことは、まだ社会的に認知されたことのない、自分ですら能力として認知していないことも「能力」として想定できることを意味する。

たとえば、他人の表情やしぐさから、その人が抱えている状況を思い描き、苦境に共感するという心の働きが起動しやすい人がいるとしよう。そして、そうした認知と感情は、自分と仕事や生活をともししている人だけでなく、道ですれ違う人や、テレビや写真などに偶然写りこんだ人に対しても喚起され、それが長年つづき、自身の生活経験とその記憶が加わって、より鮮明なものになっていったとしよう。しかし、そこからとくに目立った行動に移すほどではなく、日々の生活がそのせいでかき乱されることもなく、いわば「あたりまえの感覚」として見過ごしていたとしよう。こうした内的状態は、私秘的で非社会的な現象なので、それが「能力」だという認識を、他人はおろか本人も持たない。しかし、先の能力の定義（ある特定の状況や課題において、個人に同じ機能をもった行動を反復して起こさせる神経的・身体的ネットワークの活動）によれば、それはすでに「能力」である。そしてひよつとしたらあるとき、それまでいじったこともなかったカメラをたまたま手にして、覗き込んだフアインダーの中にそのような「能力」が喚起される人がたまたま入り込み、シャッターを押してできあがった写真を見て、自分にとつて、このような人を写真の中で表現することが大切なことなのではないかと気づくかもしれない。そして、

Ⅱ

写真の構図や被写体との関係を築くことも考えるようになり、何枚もの写真を撮りためるようになる。ここまでくればそれは、社会的に認知されたカメラ撮影「能力」である（最初は能力というより「趣味」として認知されるかもしれないが）。あるとき、それをたまたま部屋に遊びに来た友人が見て、「おまえの写真、なんか心に刺さるよな」とボソツと言ってくれたことをきっかけに、もつといる人なに見てもらいたいと思つて写真雑誌に投稿してみる。はじめは採用されないが、投稿という社会的行為自体が撮影のモチベーションをより高め、何回か続けるうち、ようやく採用されるようになる。何度目かに採用された写真が、たまたま有名な写真家の目に留まり、この人の作品にはどれもこれまでにない魅力があると感じさせて、ブログに好意的な評論文を書いてもらう。

その評価がさらに、写真界の中で地味に静かに知られるようになれば、それはもう「才能」といえるだろう。

架空のシンデレラストーリーのようにだが、実はこれは筆者がある一卵性双生児の一方の人から聞きとつた実話をもとにした話であり、なんとここに書いたようなことをきょうだいが二人とも類似した形で経験していたのである。その出発点はいきなり写

真ではなく、Ⅲそれとは直接は結びつかない、他者の表情への共感という私秘的な経験、心のクセが生み出したものが、連鎖的に結びついていったところが重要だ。このように考えると、誰にでも能力と才能の入り口の可能性は無限に、一人ひとり特有な形で、心のうちに存在していると想定しても無理ではない。

ピアノやスケートや学業のように社会的に認知された能力であれ、他者の悲しみの感情を敏感にサツチする(c)というような認知されていない能力であれ、ある時点の能力は、次の時点では学習する事前条件としての「適性」あるいは「^(注2)レディネス」とみなすことができる。学習によって知識や技能に進歩があれば、それもまた次の時点への適性やレディネスとなる。

(安藤寿康『能力はどのように遺伝するのか——「生まれつき」と「努力」のあいだ——』より)

出題の都合上、一部中略・変更した箇所がある

(注1) 親ガチャ——子どもがどんな親のもとに生まれるのかは運任せであり、家庭環境によって人生を左右される

ことを、玩具の小型自動販売機であるカプセルトイのランダム性にたとえた言葉。

(注2) レディネス——学習が成立する準備が整っており、困難なく学習できる状態になっていること。

問1

傍線部(a)～(c)と同じ漢字を含む語を、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、(a) 15、(b) 16、(c) 17。

(配点6点)

(a) ナナメ

15

- ① シャヨウ産業の復興に力を入れる。
- ② すだれを垂らしてシャコウする。
- ③ 彼は身内の人にもヨウシヤしない。
- ④ 患部に陽子線をシヨウシヤする。
- ⑤ 迷惑をかけたことをチンシヤする。

(b) テギワ

16

- ① 労働争議のチュウサイをする。
- ② 物事をキュウクツに考える。
- ③ 芸のキョクチをめざす。
- ④ 議論がサイゲンなく続く。
- ⑤ 病気の原因をキュウメイする。

(c) サツチ

17

- ① 有利な条件でラクサツする。
- ② 対戦校の試合をテイサツに行く。
- ③ サップウケイな部屋に住む。
- ④ 製品のデザインをサツシンする。
- ⑤ サツカシヨウを手当てる。

問2 傍線部X「のっぴきならない」・Y「シンデレラストーリー」の本文中における意味として最も適当なものを、次の中から

それぞれ選びなさい。

解答番号は、X 18、Y 19。

(配点6点)

X のっぴきならない

18

- ① 不本意な
- ② 無秩序の
- ③ 不完全な
- ④ 無軌道な
- ⑤ 不可避の

Y シンデレラストーリー

19

- ① 美貌を見初められた人の物語
- ② 僥倖ぎようこうに恵まれた人の物語
- ③ 天賦の才を持った人の物語
- ④ 不幸を克服した人の物語
- ⑤ 寵愛ちようあいを受けた人の物語

問3

空欄 I へ

III

に入る最も適当な語を、次の中からそれぞれ選びなさい。ただし、同じ語を二度使つてはいけません。

解答番号は、I 20、II 21、III 22。

(配点9点)

- ① 必ず
- ② きつぱりと
- ③ なぜか
- ④ おのずと
- ⑤ あえて
- ⑥ むしろ
- ⑦ 全く
- ⑧ いささか

問4

本文の内容と図1を参考に、空欄 A へ C に入る最も適当なものを、次の中からそれぞれ選びなさい。

解答番号は、A 23、B 24、C 25。

(配点12点)

A 23

- ① 自分が身を置きたい居住地の選択
- ② 自分の意志では変えられない要因
- ③ 社会の成員が受け入れるべき制度
- ④ 自分自身の性格や能力といった性質
- ⑤ 他人の意思で往々に変更される環境

C

25

- ⑤ 批判的
- ④ 世俗的
- ③ 功利的
- ② 学問的
- ① 觀念的

B

24

- ⑤ 物理的、
社会的、
世界
- ④ 心理的、
感情的空間
- ③ 經濟的、
制度的
枠組み
- ② 理論的、
抽象的
概念
- ① 抑圧的、
情緒的
社会

問5 傍線部(1)「能力」とあるが、筆者が説明している「能力」の側面として適当でないものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、26。

(配点4点)

- ① 目に見える実際の行動
- ② 万人が所持する可能性
- ③ 既存の社会的評価基準
- ④ 再現性・反復性の担保
- ⑤ 更なる能力開花の土台

問6 空欄 D に入る最も適当なものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、27。

(配点4点)

- ① その背後に「数学能力」という抽象的な構成概念を想定することができる
- ② その行動に「数学能力」という学問上通用する名称を与えることができる
- ③ その時点で初めてこれらを総合的に「能力」として認定することができる
- ④ その人物固有の可変で外在的な要素である「努力」を認めることができる
- ⑤ その一連の行動の形成に「遺伝」の関与の度合いを考察することができる

問7

本文の内容に合致するものを、次の中から選びなさい。

解答番号は、28。

(配点7点)

- ① 数学的・芸術的ジャンルにおいて「生まれ」つまり「遺伝」の要素は大きいものの、それが他の要素の影響を排除するほどの影響力を持つとは言い難い。
- ② 生まれた家庭や地域社会の影響である「環境」は可変の要素であり、個人の働きかけ次第で自由に変えられるものとされ、能力の形成には関与しない。
- ③ 「能力」が社会的評価で価値づけられ、偶然の要素の影響を受けつつも、環境と学習を経て開花する概念であるという新たな視点が提示されている。
- ④ 図示されているように「努力」と「ガチャ」は従来の考え方では正反対のものとされるが、本文はこの考えに立脚せず、かつ、双方に一定の価値を認めている。
- ⑤ 「遺伝」「環境」などの四つの要素の考察にあたり、これらを社会的なものと把握して議論が進んでおり、生物としての人間という要素は巧みに捨象されている。